

1. 略歴

- 1987年3月 東京大学文学部英語英米文学専修課程卒業
1989年3月 東京大学大学院人文科学研究科英語英米文学専攻修士課程修了
1993年9月 マサチューセッツ工科大学大学院言語・哲学科博士課程修了
博士号 (Ph.D. in Linguistics) 取得
博士論文 AGR-Based Case Theory and Its Interaction with the A-bar System
1994年4月 神田外語大学外国語学部英米語学科専任講師
1997年4月 同 大学院言語科学研究科助教授
1998年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2016年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

英語学/理論言語学

b 研究課題

程度表現の構造と意味

c 概要と自己評価

2018年度は科研費基盤 (C) の課題「日英語の程度表現の統語構造と意味」の4年目にあたる。主たる成果は、程度変項の全称量化が日本語に存在しているという事実の発見である。日本語に限らず他の言語においても、同種の統語パターンが存在することが報告されたことは知る限りこれまでになく、画期的な成果だと自負している。これは不定 (indeterminate) が関わる現象なので、譲歩節を除けば英語には存在しない日本語の特徴である。当該現象が否定極性や自由選択の性格を帯びる場合についての論文が、極性についての論文集に収録された。否定極性や自由選択との関連では、名詞修飾の最上級が英語で類似のデータパターンを示すことがよく知られているのだが、日本語の最上級は英語で見られる絶対用法を欠くという発見も、この研究の副産物として特筆に値する。日本語の最上級が序数詞を使うという特徴に関連していると考えて間違いない。日本語の最上級に欠けている用法は、スウェーデン語において通常の最上級と形態上区別されており、日本語の特徴はこの区別をさらに裏付けるものとなっている。

上記科研費課題の最終年度である2019年度は、大きさをあらわす述語が修飾している名詞に内在する程度を示すという現象について2017年度から取り組んでいたものを論文にまとめた。近く刊行予定である。この研究から浮かび上がってくる特筆すべき日本語の特徴は、程度修飾の意味を表現するには普通の形容詞ではなく「おお」や接頭辞「だい」という形態的に特化した形式に依存するという点であり、本研究では、英語その他の言語を扱っている先行研究で気づかれていなかった程度修飾のためのサイズ表現の普遍文法上の特殊性をあぶり出すことに成功した。

d 主要業績

(1) 著書

共著、Watanabe, Akira (ほか多数)、『The Handbook of Japanese Contrastive Linguistics』、De Gruyter Mouton、2018.2

(2) 論文

渡辺明、「程度修飾と極性が交差するところ」、『極性表現の構造・意味・機能』澤田治・岸本秀樹・今仁生美 [編]、開拓社、128-152 頁、2019.11

(3) 学会発表

国際、Akira Watanabe、「Ordinals, superlatives, and linearization」、7th Workshop on Phonological Externalization of Morphosyntactic Structure、北海道大学、2018.9.14

国内、渡辺明、「名詞の最上級?」、日本英語学会、横浜国立大学、2018.11.24

国内、渡辺明、「Pred⁰」、日本英語学会シンポジウム、横浜国立大学、2019.11.9

3. 主な社会活動

(1) 学外組織 (学協会、省庁を除く) 委員・役員

Linguistic Inquiry (出版元 MIT Press)、編集委員、2018.4~2020.3

Journal of East Asian Linguistics (出版元 Springer)、編集委員、2018.4~2020.3

the Language Faculty and Beyond (John Benjamins), advisory board member, 2018.4~2020.3

Acta Linguistica Academica, 編集委員, 2018.4~2020.3

日本英語学会, 評議員, 2019.4~